

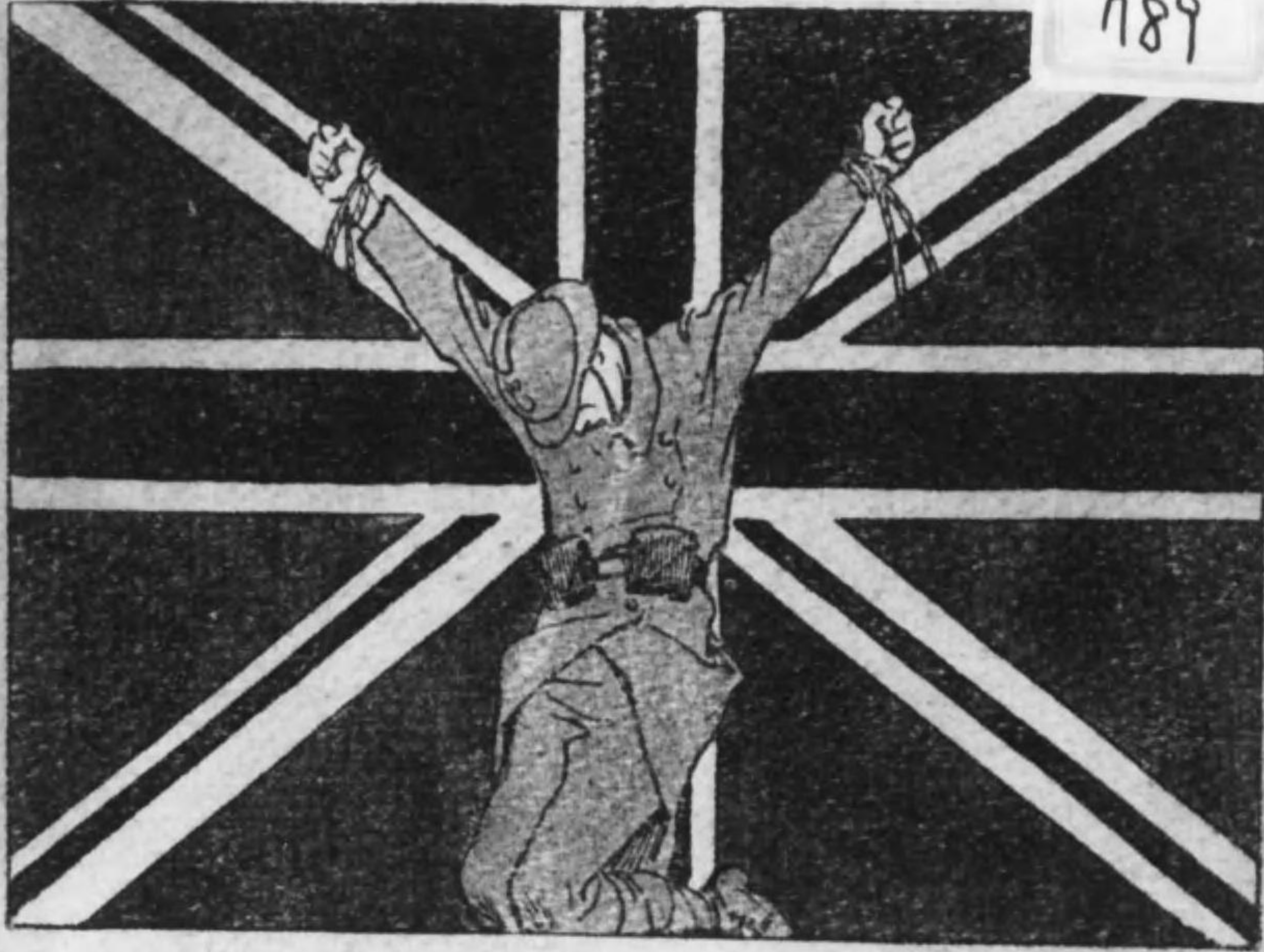
特277-789



*76W10728 *

特277

789



！架字十のスリギイ

道報マデの佛英

版社信通同合聞新



始





英佛のデマ報道

一九四〇年(昭和十五年)五月十日から同六月十六日まで獨軍の西部戦線攻勢中に於けるロンドン及びパリよりの日々の報道を要約して見る。



英海軍の連日危禍



航行不能但し公表し難し

爆殺により火災を起す

他の船と衝突して

珊瑚礁に乗り上げる

五月十日 (ロンドン、放送)

「最後の時は来た、といふヒトラーの言は眞理となるであらふ。攻撃はドイツの災禍となるであらふ」

五月十一日 (ロンドン、ロイテル通信)

「今夕、ロンドン権威筋の洩らす所によれば、ベルギーの飛行場五ヶ所を占領せりとのドイツ側の主張は事實無根である。一つの飛行場も占領されてゐない」

五月十二日 (ロンドン及びパリよりの放送)

「ドイツ側に於ては早くより落下傘部隊出動を準備し居たるも、完全なる失敗なることを曝露した。」

五月十三日 (パリ、アヴァス通信、ロンドン・タイムス)

「ベルギーに於けるフランス軍司令部はドイツ戦車に抵抗す可き防壁を構築した」

「兩三日來、(但未だ前途遠遠なるも) 勝利の戦に近づきつゝあることが明かになつた」

五月十四日 (デヴェントリー放送)

「ノルウェーがドイツ海軍に禍せると同様、オランダ及びベルギーはドイツ空軍の禍の種とならうとしてゐる」

五月十五日 (ロンドン、ロイテル通信)

「北部ベルギー戦局は我に有利である。フランス軍マース河畔を固守し、オランダの屈服後もドイツ軍の進撃に對する聯合軍の反撃は強硬に持續されつゝある」

五月十六日 (ロンドン、放送)

「マース河畔戦の最初の戦果は聯合軍に極めて有利である」

五月十七日 (パリ、アヴァス通信)

「英當局は完全なる確信を以て軍事情勢を注視してゐる。或る數のドイツ戦車は大に進出したるも、右は左程強力ならず、その作戦行動は徒勞である。ドイツ機械化部隊はその盲進により自ら危地に陥つた。之に對し聯合軍は強硬に反撃を加へつゝある。獨逸戦車の燃料及び彈藥缺乏は眞近に迫つてゐる」

五月十八日 (パリ、エボツタ)

二

76W10728



三

「ドイツ空軍の優位は日毎に失はれ、目下ドイツ空軍の制空権は何處にも存在しない」
五月十九日 (パリ、アヴアス通信)

「かくてドイツ軍の攻勢は後退を開始した。しかも時の経過と共に進出は益々困難となりその効果は減少する。間隙は縮少しつつある。」

五月廿日 (ロンドン・タイムス及びパリ、プチ・パリジャン)

「ドイツ軍の大攻勢は自軍の敗戦への萌芽を有してゐる」

「フランス軍指導部は数日中に獨軍の進撃を制壓するであらう」

五月廿一日 (ロンドン、ロイテル通信)

「突出せるドイツ軍前進陣地は、その聯合線益々長く、不安となるを以て、その保持は益々困難となるであらう」

五月廿二日 (パリ、ボビユレル)

「英佛空軍は制空権を奪つた」

五月廿三日 (パリ、アヴアス) 通信

「フランス軍當局の観測に依れば、キャンブレ附近の戦闘はフランス軍に極めて有利に展開しつつある」

五月廿三日 (パリ、放送)

「ドイツ側放送の反対主張に反し、カレー防衛は安全である」

五月廿四日 (ロンドン、ロイテル通信)

「シエルデ河戦線の守備は目下堅固である」

五月廿五日 (パリ、アヴアス及びプチ・パリジャン)

「フランダース戦の成功は疑なし」

「配下の諸將星の支持により、ウエイガン將軍は勝利を獲得するであらう」

五月廿六日 (パリ、オールド)

「ドイツの勝利は正に危機一髪であつた。ヒトラーはこの一髪を掴み損ひ、もはや再び發見すること不可能であらう」

五月廿六日 (オーヅル、マダム・タボア)

「ドイツ軍参謀本部は、如何なる犠牲を拂ふとも處期の計畫を貫徹せんとしてゐるが、ドイツ軍にはその準備なく、ドイツ國民をして開戦以來二度目の冬を迎へしむることゝならう」

五月廿七日 (パリ、オーヴル及びブチ・パリジャン)

「聯合軍の狀勢改善されたること、及び、最後の決戦を目ざして全力が準備されつゝあることは確實である」

「至る所に於てドイツ軍の攻撃は失敗した」

五月廿八日 (ロンドン、アヴアス通信)

「軍事狀勢未だ重大なることはロンドンに於ては公表され居るも、聯合軍の防禦及び攻撃が明かに著しく有利となりたることを主張してゐる」

五月廿八日 (パリ、オーブ)

「聯合軍司令部の全軍統帥は再び順調となり、フランス軍の防禦線が間もなく勝利の攻勢に出づるは確實である」

五月廿九日 (パリ、アヴアス通信)

「ドイツ軍は撃退されて再び苦戦に陥つた」

五月卅日 (ロンドン、アヴアス通信)

「聯合軍を海上へ壓迫せんと計畫の下に行はれた敵軍の反撃は悉く撃退された。英佛軍の協力が今日程緊密なることはない」

五月卅一日 (ロンドン、ロイター及びタイムズ)

「二週間後、野戦は塹壕戦に變化した。記者の見る所に依れば將兵は休戦状態である」

「聯合軍はドイツの敗戦の準備を爲しつゝある」

六月一日 (パリ、マタン)

「フランドースに於ける退却は戦闘精神の弱化にあらずしてその昂揚を意味する」

六月二日 (パリ、エボック)

「如何にドイツ軍の攻撃が行はれるとも、フランス軍にとつては、五月十日よりも狀勢は有利である。その理由次の如し。」

一、フランス空軍はアメリカの資材によつて強化され、今日も以前と同じく強力である。然るにドイツ空軍は莫大なる損害を蒙り、その優位を失つた。

二、ドイツ軍の突破力は著しく弱化した。フランス軍の對戰車防禦技術は完成した。

三、最近の戦闘に於てフランス歩兵はドイツ歩兵よりも明かに優秀なることを示した。この事實により、戦闘部隊の士氣は最高潮に達した。

フランスの前途は尙數週間は極めて困難であらう。然しながら危機は去つた。時は英佛に味方してゐる。」

六月三日 (パリ、放送)

「奇蹟は開始された。フランダースに於ける退却は勝利に發展してゐる」

六月四日 (パリ、レオン・ジウオー及びロンドン、チャーチル)

「我々は戦勝を決心した。我々は勝利を獲得するであらふ。」

「英帝國及びフランス共和國は一致して死すともその祖國を守り、相互によき战友として最後まで戦ふであらふ。」

六月五日 (パリ、放送)

「軍隊の士氣は極めて旺盛である。ウエイガン線の堅固は疑ひの餘地がない」

六月六日 (パリ、ジュールナル)

「フランス軍は、常に會てよりも更に強固なるマチノ線を有することを忘れてはならない。若しマチノ線がなかつたならば、或はその一點が破れたとすれば、フランス軍の勢が何うなるであらふかといふことに一度思ひを致す可きである。然し諸君安心してよろしい。マチノ線は破られはしない。頑丈で不落である。ドイツはこの線で皆齒を缺いてしまふであらふ」

六月七日 (パリ、アッアス及びロンドン、ロイテル通信)

「軍當局は兩三日間の戦局及び殊に戦車に對する戦果に就き極めて満足してゐる」

「フランス軍は既に新ソナム戦及びアイスネ戦に於て新しい著想を最も輝しく發揮した。僅か三週間で準備した防禦線が大抵の地點でドイツ機械化部隊の攻撃を支へた」

六月八日 (ロンドン、デーリー・テレグラフ)

「ウエイガンの深い防禦線は、ドイツ軍の進撃を阻む上に最善の方法である」

六月九日 (ロンドン、オブザーヴァー及びサンデータイムズ)

「ヒトラーの新部隊は敗けるに極つてゐる。今日のドイツは前大戦の如く多く軍隊を有してゐない」

「ドイツ軍は勝利を望むことは出来ない。聯合軍の勝利も未だ前途程遠いことではあるが然し確實である」

六月十日 (ロンドン、放送)

「或る有力なフランス人は、若しいつかヒトラーがパリを占領を試みるならば、各家、各石も悉く防衛されるであらふ。パリ人は幾多の美術品を有するこの町を侵入者に任せざるよりむしろ之を完全に破壊してしまふであらふ。兎に角フランスは降服しないであらふ。——ドイツ兵の死體で間もなくパリーの通りは被はれるであらふ」

六月十一日 (フランス軍戦況報告)

「新鋭英軍乗船せり、而して後續部隊續々と來援中、との通知によつて朝野は非常に元氣

づけられたり」

六月十二日 (ストラスブール、放送)

「ドイツ軍は未曾有の損害を蒙つたがフランス軍は無傷である」

六月十三日 (ロンドン・タイムズ)

「パリ―防衛は英國防衛である。若し敵軍がパリを占領すれば、我々は、敵軍をパリ―及びその侵入した土地から完全に撃退するまで戦はなければならぬ」

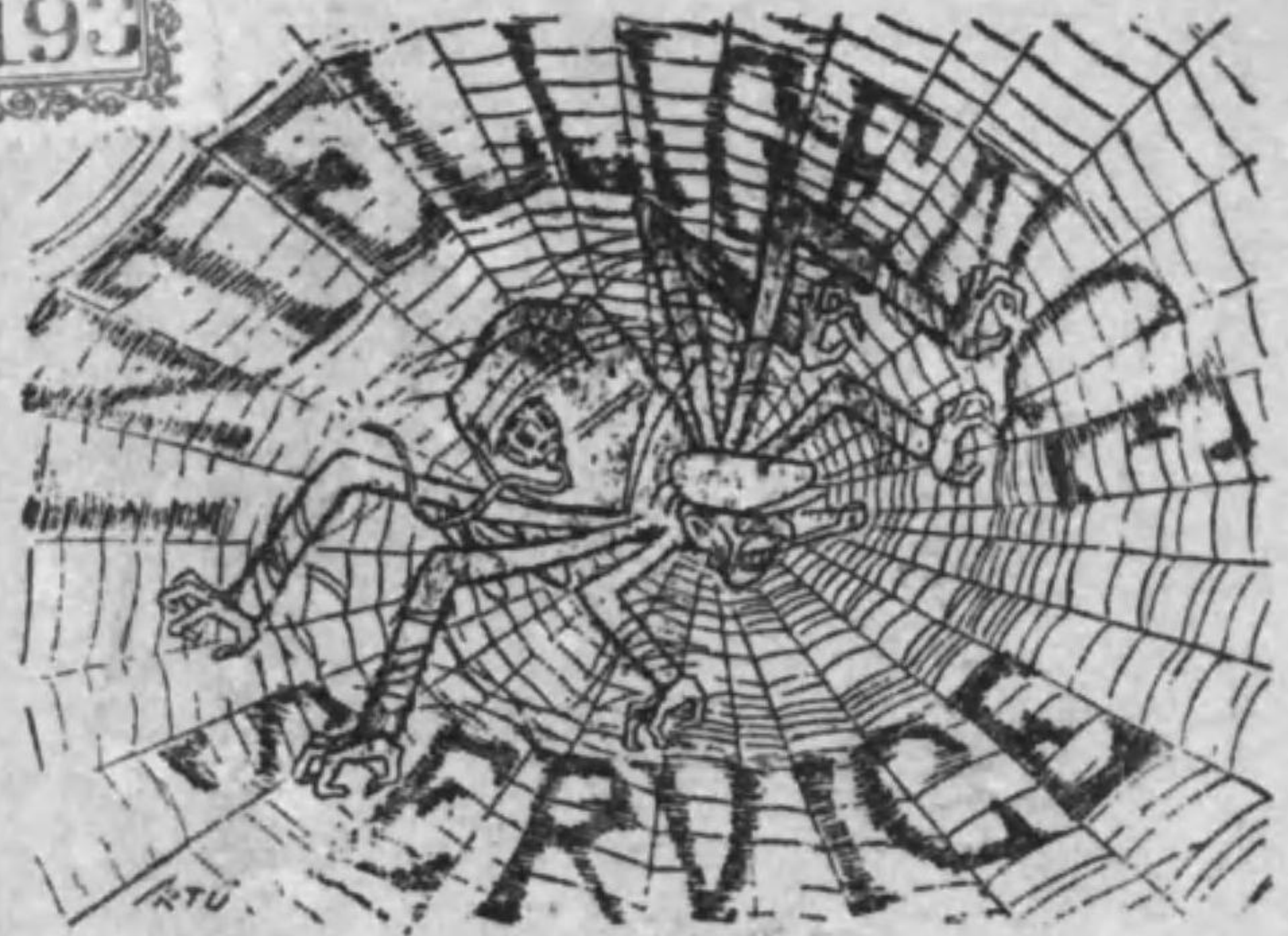
六月十四日 (ロンドン、ロイテル通信)

「最近數日間、英國の遠征軍新鋭部隊をフランスに輸送する爲に多くの船がこの港を出發した」

六月十五日 (フランス戦場よりのロイテル通信)

「フランスの各道路を最近セイヌに向つて進んだ英國精銳軍はフランス軍を救援する爲に配備についてゐる。この部隊はフランスのこの重大な戦局に於て重要な役割を演ずるであらふ。將兵は好調にして士氣旺盛である」

408
1933



自縊七轉八倒に陥つた英秘國密報機關

昭和十五年九月十四日 印刷
昭和十五年九月十五日 初版發行

【定價 金五錢】

編輯人 亞細亞大陸協會調查部

發行人 亞細亞大陸協會

東京市京橋區銀座一ノ五
亞細亞大陸協會內

發行兼印刷人 古森貞久

發賣元 東京市京橋區銀座一ノ五
新聞合同通信社

電話 東京橋六六五五番
電報 東京二九九三番

六月十六日 (ポルドー發、ロイテル通信)

「フランスが獨逸に對し、休戰條件通告を懇請したとのアメリカの報道はハツキリ否定された」

六月十六日 夜

ベタン元帥の放送演説。

「フランス人諸君！

.....

我々は戰闘を停止しなければならぬ。余は、我々の敵に對し、一兵士としての余と、而して名譽ある基礎の上に、戰闘行為終了の可能性に就き、交渉する用意ありや否やを通告した」

終



げ逃らか線戦スーダンラフ度今はてスリギイ
す興授を『章勞功却退』にめたの兵將たつ歸
。るあて本見のそはれこ。たつなにとこる